

テーマ：少林寺拳法の「人づくり」が社会の役に立った（立てる）と感じた瞬間

昨今、「生産性」という言葉を耳にする機会が増えた。5年前に起きた相模原障害者殺傷事件犯人の「障害者は生産性がないから生きている価値がない」という趣旨の発言や、衆議院議員の「LGBT は生産性がない」という発言を覚えているだろうか。つい最近も LGBT 理解増進法案に反対する議員が「人間は生物学上、種の保存をしなければならず、LGBT はそれに背くもの」と発言していた。

私は、人間の価値を「生産性」というものさしで測ること自体間違っていると思う。かく言う私も以前まで「生産性」に囚われていた。「役に立つ」＝「生産性がある」ことだと思っていた。しかし私は大学少林寺拳法部に入り、修練する中でこの考えを一新した。入部した当初は、「大会で成績を残して、この部に貢献したい」と思っていた。しかし私は不器用であった。体を動かすことも得意ではないし、技を習得するのに時間もかかる。1回生の終わり頃、大会で成績を残せなかった私は「この部の役に立っていない。辞めた方が良いのではないか」と考えるようになった。つまり自分には「生産性」（存在価値）がないということだ。そんなことを先生に相談したとき、このような言葉が返ってきた。

『我が部は、大会で成績を残すことを「目標」の一つにしているが、「目的」ではない。成績を取ったからといってこの部で偉くなるわけでもない。』この言葉で私は、存在価値は「生産性」の有無にかかわらず、「ある」と思えるようになった。また、私の不器用ながらも努力する姿を見て、勇気を貰っていたと同期に言ってもらえた。私は微力ながらも部に良い影響を与えられているのだと嬉しく思った。少林寺拳法は、自分のことしか考えていなかった私に他人のことを考える大切さを気づかせてくれた。自分の可能性を信じる事が出来た時、ようやく周りに目を配ることが出来た。自分自身の心身が鍛えられると他人のことを思う余裕が出てくる。そこで何か出来ることはないかと、重度障害者デイケアのボランティアを始めた。以前の私であれば、「生産性」があるのかと疑問に思ってしまった人たちだろう。だが、私はその方々と話すことで心が安らいでいることを実感した。例え「仕事」が出来なくても彼らは社会を明るくする力がある。私は「社会」は他人との関わりのことを指すと思う。家族や友人関係も「社会」の一つだ。ボランティアにおいて私がその方々の役に立っているかは分からない。しかし自分とは違う「他者」を理解する大切な時間になっている。まずは「他者」を理解することが、開祖が考える理想境建設への第一歩ではないか。

人は「生産性」がなくともただ生きているだけで価値がある。それに気づかせてくれたのは少林寺拳法の教えだ。「半ばは自己の幸せを、半ばは他人の幸せを」自分のことも他人のことも考え続けられる人でありたい。